

2021年12月12日（日）主日朝礼拝説教

『お言葉通りになりますように』井上隆晶牧師
ルカ福音書1章26～38、46～56節

①【処女降誕とは？】

アドヴェントの第三週になりました。今週は受胎告知のお話をしましょう。

ナザレという町にいたおとめマリアのもとに天使ガブリエルがやってきてこうい
いました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」（ルカ1:28）

この挨拶を聞いたマリアは戸惑い考え込みます。するとガブリエルは「マリア、
恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の
子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。」（31節）といひます。その時のマ
リアはまだ15歳くらいだったといひます。マリアはヨセフと婚約していましたが、
まだ結婚していませんでしたので「どうしてそのようなことがありえましようか。
わたしは男の人を知りませんのに」といひると、ガブリエルは「聖霊（神の霊）が
あなたに降り、いと高き方（神）の力があなたを包む。だから生まれる子は聖な
る者、神の子と呼ばれる。」（1:35）と説明します。

処女が子供を宿すということをキリスト教の用語で「処女降誕」といひますが、
これをどのように考えたらいひのでしょうか。私は処女が身ごもるといひること
についてあまり驚きません。聖霊が降るとは、神の力によってなるといひること
ですから、人の力を越えているといひこと（ sacramental ）です。この世には人間の
力を超えた事があると信じています。神は誰の力を借りることもなく存在して
おられる方ですから、神が人となる時にも、男の力を借りないで存在することが
できると信じています。人間は救いを必要としており、一方神は、人と共に生き
死ぬための体を必要としていました。幼いマリアがそのための身体を提供したの
です。彼女の中で天と地が、神と人が初めて一体になり、イエス様が生まれまし
た。創られざる方が、創ったものと一体になり、御自分の性質を変えることなく、
新しい者となられました。マリアはこうして天と地を結ぶ梯子、天国の門となり
ました。彼女を通して神はこの世に来られたからです。

②【お言葉どおりこの身になりますように】

ガブリエルのお告げに対してマリアはすぐに「わたしは主のはしためです。お言
葉どおりこの身になりますように」（38節）といひてその身を献げていきました。
神様は救いの業を行うにあたってまずマリアの同意を求められました。聖書の言
葉を聞く時、そのあまりにも人間離れた約束に戸惑い、人間的な思ひで「無理
ではないか、出来るはずがない」と思ひすることがありませんか？しかし私にはでき
なくても神には出来るのです。私たちの求められているのは小さな信仰です。マ
リアがその言葉を受け入れた時、彼女の中に神の子キリストが生まれました。マ
リアの上に起こったことはすべての人の上に起こることなのです。私たちも神の

言葉を信じて受け入れるとき、聖霊の働きによって私たちの中に霊的にキリストが生まれるのです。

この「お言葉どおりこの身になりますように」という言葉は、私たちがふだん祈っている主の祈りの中の「御心が天で行われるとおりに、地でも行われますように」という祈りと同じです。この場合の「地」とは自分自身の事です。私の上に神様の御心を行ってくださいと祈っているのです。それはまたイエス様がゲッセマネで祈られた「あなたの御心が行われますように」(マタイ 26:42)という祈りとも同じです。この祈りはキリスト教にしかないものです。他の宗教ではこのような祈りはしません。自分の願い、自分の思いが叶うように祈ります。神の御心が成るといふ事は、良い事ばかりではありません。実際マリアはこの後、救い主の母になるという過酷な運命を負わされることとなります。ナザレでは私生児といわれ、白い偏見の目で見られましたし、次から次へと理解できないことが起こってきます。そして最後は最愛の息子の十字架刑です。心が剣で裂かれるような思いをしてゆくこととなります。信仰生活を送るといふことは、神様から「良いもの」をもらうだけでなく、「嫌なもの」ももらう覚悟をしなければなりません。「あなたの御心が行われますように」という祈りは、重い祈りです。神の御心は、私の思いと違うからです。私の思いを手放さなければなりません。それはなかなかできるものではありません。一生かかると思っています。イエス様でさえ血の汗を流して従ったのです。でもそれをせずには本当の神の子にはなれないと思います。

●アン・ミカさんというファッションモデルの方がいます。モデルだけでなく幅広くいろんな活動をしている大阪出身の在日韓国人です。子どもの頃、韓国人だという事でいじめられたそうです。それでも彼女がひねくれなかったのは両親のお陰だと言います。ミカさんがいじめられたことを伝えると、母親はいじめた子たちを家に呼び、ラーメンをご馳走したそうです。まさに「敵を愛せ」です。またある時、ミカさんがパン屋にいる時にいじめっ子にトングで手を叩かれ、血が流れたのをきかっけに大喧嘩になりました。両親は「喧嘩をしたことは謝ります。しかしミカに怪我をさせたことは謝って下さい」と毅然とした態度で、ミカさんを守ってくれたそうです。やがて母親が病気になって入退院を繰り返し、実家が二度火事になって立ち退きを命じられ、父親は仕事が失敗して出稼ぎに出かけます。家は極貧でした。そんな両親も亡くなり、兄弟五人が残されました。子どもたちは親戚や教会に預けられて育ったそうです。たぶん教会に通っていたのだと思います。ある時、ミカさんは教会の神父さんに「何で自分ばかりこんな辛い目に遭わなければならないのか」と聞いたそうです。すると神父さんは「大丈夫。若い時の苦しみは神様からのプレゼントです。苦しみが大きいほどあなたは大きな器になり、同じように苦しんでいる人を助けることができるようになります。自分の周りに起こって来る出来事を信じなさい。」と言われたそうです。それからは「自分ばかり」と嘆くのではなく、「自分には負えるからだ」と思うようにし、いろんな人に助けられて今日の自分があるそうです。

神はいろんな方法で今日も働いておられます。自分の周りに起こって来る思いがけない出来事を、神の御心だと信じたいと思います。

③【わたしの魂は主を崇める】

マリアは親戚のエリサベトを訪問し、賛歌を歌いました。「わたしの魂は主を崇め、私の霊は救い主である神を喜びたたえます。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」(47～48節) この「崇める」をラテン語で「マグニフィカート」といい、「大きくする」という意味です。地震の単位の「マグニチュード」も、「マグカップ」の「マグ」も同じ「大きい」という意味です。それゆえこの賛歌は「私の魂は主を大きくしています」という意味になります。私の中で自分というものが「小さくなってゆき」、神様が「大きくなってくる」ということです。自分がしたことがちっぽけに見えてきて、神様がして下さったことが大きく見えてくる、これが神を崇めること、神を喜び讃えることなのです。「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから」と言ってマリアは、神様は自分にして下さったことがものすごく大きく見えているのです。それはマリアだけではありません。私たちキリスト信者にも同じなのです。この「神の恵みが見える」ということが神の御心を受け入れてゆくための秘訣なのです。自分の願いが叶えられなくても、神の溢れる恵みが見えてさえいれば、お釣りがくるのです。

●カトリック東京教区名誉司教の森一弘神父は「私はこれまで、一度も『主よ、用いて下さい』と叫んだことがない」といいます。むしろ「この私を支えて下さい、私をしっかり掴み、私のいのちを包み、温めて下さい」と叫び続けてきたといいます。彼は横浜の繁華街、伊勢佐木町に生まれ、戦争を体験しました。ここは港に近いので危ない、真っ先に空爆されると親は心配し、転々と引っ越しをしました。引っ越すたびにそれ以前住んでいた家は、焼夷弾を受け燃えてしまいました。横浜の街が大空襲を受けた時、丘の上から横浜の街が真っ赤に燃え上がる恐ろしい風景を見ました。彼が七歳の時ですが、その時から、心の奥深くに「この世界のすべてのものはいずれ破壊され消えてゆく、後に何も残らない、というこの世界の不安定さ、もろさ、儚さが、深く刻み付けられたそうです。高校三年の時、自分の心を支える絶対的なものを求め続けてカトリック教会の司祭の部屋の扉を叩きました。それ以降、「神は私の存在を支える揺るぎない巖となり、私をしっかり支え導いてくれました。神は、私の生涯の恩人といっても過言ではありません。…そんな私の歩みを、私は、神様からの召命であり、献身であったと、明言する自信はありません。天国に行って、神様の前に出た時、『こんな歩みしかできませんでした。おゆるしてください』と頭を下げるつもりでおります。」

彼は自分は「献身」などという立派なことをした覚えはない、むしろ自分は神に拾われ、支えられ、今日まで歩ませてもらった、と神の恵みが大きく見えているのです。それはマリアと同じ姿勢だと思えます。幸せは、神が私にして下さったことの中に見なければなりません。私は選ばれ、信仰が与えられ、最も確かなキリストと一体にされました。その絶対的な安心感を与えられたことを感謝したい

と思います。